

### 小樽商大の次期学長「海外と連携」

4月に学長に就任する小樽商大(北海道小樽市)の穴沢真・国際連携本部長(63)が17日、同大で記者会見を開いた。専門は経済発展論や国際経営論。大学の国際交流に長く携わってきた経験から「海外の大学との協定など連携を進め、学生や教員の交流を増やしたい」と意気込んだ。

学長選考会議で穴沢氏を選んだ。学長選考会議議長で前室蘭工業大学学長の佐藤一彦氏は「国際関係のポストが長く、グローバルを標榜する大学の考えにも合致する」と選出理由を説明した。

# 小樽人口2119人減 11万4397人

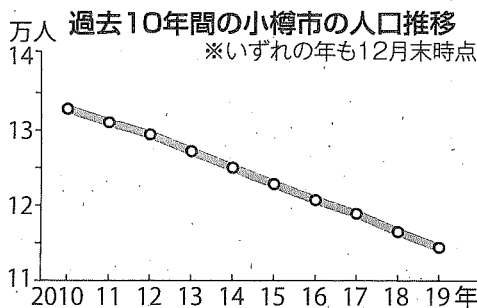
## 19年 出生数 最少440人

2019年12月末時点の小樽市の住民基本台帳に基づく人口は11万4397人と、前年同期と比べて2119人減少した。出生数が2年連続で500人を割り込み、19年は前年比44人減の440人と過去最少を更新。人口の減少幅は若干減ったものの、若年層を中心とした転出超過や少子高齢化への歯止めは掛かっていない。

### 若者の流出止まらず

人口は1964年の20万7093人をピークに、ここ数年は毎年2千人前後のペースで減少し、22年（大正11年）の11万7953人と同水準となっている。2019年の人口減少を内訳で見ると、死亡数から出生数を引いた「自然減」が前年比34人減の13883人、転出数が転入数を上回る「社会減」が同254人減

の736人。ともに減り幅は前年より小さいが、過去5年間の平均並みだった。出生数の低下も人口減の一因。市内の出生数は67年の3268人をピークに、99年に959人と千人を下回り、18年には484人と500人を下回った。出生数の減少がこのまま続けば、20年にも300人台に突入する恐れがある。



若者の流出も止まらない。20～39歳は1万6855

1人。18年と比べ792人減で、社会減全体の数値を上回った。就職や勤務地に近い札幌などへの転出が主な要因とみられる。この年代のうち女性は8461人で、前年より427人、09年より5088人減少した。

若者の転出超過や出生数の低下によって高齢化も進む。高齢化率は19年3月に40%を超え、同12月末には40.44%に上昇している。市と小樽商科大でつくる人口減少問題研究会が18年にまとめた報告書では「年齢構成バランスを回復するためにも、子育て世代をターゲットにし、雇用よりも子育て環境の整備を優先するべきだ」と指摘された。市は昨年11月から部局横断の会議を設け、新年度に向けて喫緊の課題や子育て支援策を検討。市は「特効薬はないが、さまざまな分野で政策の実効性を高めたい」としている。

（谷本雄也）

# 「地酒で地域振興を」

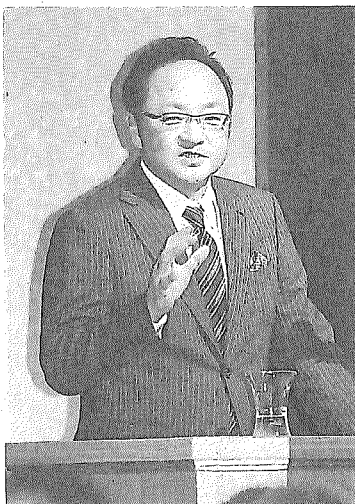
## 上川大雪酒造 塚原社長が講演

道政経懇

北海道政経懇話会(代表幹事・広瀬兼三北海道新聞社社長)の1月例会が20日、札幌市内で開かれ、上川大雪酒造(上川管内上川町)の塚原敏夫社長が「酒蔵創成による北海道の地域振興の考え方」と題し講演した。2017年に上川町内に道内12番目の酒蔵を造ったことについて「地酒で地域振興をしたい。上川町を何と

かしたいという思いだった」と振り返った。

塚原さんは札幌出身。小樽商科大を卒業後、野村証券に就職した。外資系金融機関などを経て、12年にはフレンチシェフの三國清三さんとともにレストラン運営会社を設立し、上川町内にレストランを開設。17年には酒蔵「緑丘蔵」を造り、初代蔵元となった。



地酒による地域振興や帯広畜産大で進む酒蔵づくりなどについて語る上川大雪酒造の塚原敏夫社長

道産米と上川の水で造った特別純米酒は、18年度の新酒鑑評会(札幌国税局主催)で金賞を受賞。塚原さんは「上川にしか売っていない酒をいろんな所から買っていくようになり、経済効果も大きい。地域振興は地域にあるものを『アップグレード』するのではなく、

地域になかったものをつくるのが重要」と話した。

帯広畜産大と連携して大学構内に酒蔵を設けるプロジェクトも進めており、「目的は人材育成と教育。土づくりから加工技術、マーケティングまで学べる施設にしたい」と強調した。

(徳永仁)

「上川大雪酒造 塚原敏夫社長は本学OBです」